

強者の戦略

第6回 南

～2年生～

こんにちは！地理の南です。久しぶりに京大話をしようと思います。前はNFの話をしましたね。今回は、文学部生の2年生、というか、私の2年生時代について話していこうと思います。この2年生時代は、私の人生史上最低の1年だったと思います。高3のときに大して勉強せず、京大に不合格になった1年以上に残念極まりない思いをいまだに抱えています。しかし、今につながる1年だったとも思えるので、何とも形容しがたい感慨もありますね。

11月のNFを終え12月の授業が終わると、1～2月はレポート提出・試験期間となります。授業担当の教授が執筆している本を図書館で借りて適当に一部分を引用して即席でレポートを作成し、総合人間学部窓口付近の各授業ごとのレポート提出箱が並んでいるところで提出(ホントに受理されているか不安)、さらに、クラスの試験対策委員からもらったプリントなどを駆使しながら必死で頑張り、授業も出たことないのに試験を受ける、というような生活が1月のメインとなりました。語学の授業もないので、クラスみんなに会えるのは、英語の試験日しかありません。この日はみんなで鴨川河川敷で3時間ぐらいサッカーをしましたね。

2月になると自宅生でサークルもやっていない私は、学校に行く必要性がなくなり超ひま人になりました。ということでアルバイトにいそしむことにしました。交通量調査をしたり、ダイエーの地下食料品売り場で品出しをしたり、運輸センターで荷物の仕分けをしたりしました。ダイエーで働いていると、芸能人の営業姿を目撃することができました。もうみんな知らないと思いますが沖縄出身の早坂好恵さんが特設ステージで新曲のプロモーションで歌っていました。あと、当時大人気だった「タマゴッチ」がいつ入荷するかが分かるんですよ。でも、アルバイトふぜいが容易に取り置きすることはできず、棚に並べられたら即売り切れになるので、目の前にあるのに購入できないというジレンマに陥ります。あのと時の悔しさがあるので、いまだにちょっと「タ

マゴッチ」やりたいですもんね(笑)。あと、関係ないですけど、アメリカ人も探しに来て「タマゴッチ」ってガチな発音で聞いてきて面白かったです。

あと、今まで言ってませんでした、某塾の個別指導の日も一杯入れるようにしました。人の出会いってというのはなかなか面白いものがありますよ。4～5月ぐらいに参加したどこぞのサークルの飲み会が三条のどこぞの店で開かれていたのですが、それが終わって鴨川付近で酔いさましをしていたときがありました。そのときに橋の上に小学校時代の同級生らしきNさんがいたようないないような、そんな感触がありました。すると、翌日ぐらいにそのNさんから自宅に電話がかかってきて(小学校時代の連絡表でも見たのでしょうか)、「南、あんとき橋の下にいたよな!」と言ってきます。やっぱりあの感触は正しかったのです。Nさんは「私、某塾の塾講師になりたいねん。一緒に試験受けようよ」と提案してきました。私もその塾に小学生時代通っていたので、これも縁かなと思って試験を受けて、1年生の7月ぐらいから個別指導を始めていました。

2月から個別指導でよく某塾を頻繁に訪れるようになる、「社会の講師が不足しているから、君やってみないか?」と社員さんに声をかけられました。当時ひまだったということ、稼げるかもしれないと思ったこと、何より、研伸館で習っていた日本史の宮本先生の授業に憧れていて自分もそんな講師を目指してみたいと思ったこと、などが相まって、そのオファーを受けることにしました。なので、某塾関係にアルバイトは絞りましたが、3月ぐらいからはかなり忙しい日々を送るようになります。私は人前でしゃべるのが苦手だったので、今の講師人生があるのは、「Nさんが橋の上から私をみかけた」ことによるものだと思っています。

そうこうしているうちに4月になり2年生が始まります。最初のイベントは成績表の受け取りです。受けた試験や提出したレポートが何点だったのかが明るみに出る瞬間です。私は、狙った単位はほぼゲ

強者の戦略

ットし、中国語の点数も 90 点を越え、大満足の結果となりました。中国語の点数の低かった O・R 君に、ちょっと嬉しげに見せちらかしてしまったりもしましたね。でも、この有頂天が学生生活最大の誤算だったのです！

私は塾講師の業務に邁進し充実感を感じていました。成績表の優秀さに満足感を抱いていました。この高揚した感情が、どういうことか向学心に向かってしまったのです。細かく説明すると、2 年生になっても、英語Ⅱ・中国語Ⅱというちょっとレベルが高い語学の授業を履修しなければならないのですが、この履修を決めるのには抽選があります。受講したい教授の教室に行き、希望者が多い場合は抽選で受講生が決まります。単位認定が簡単そうな教授の部屋には 2 年生が殺到し、厳しそうな教授の部屋は閑古鳥が鳴くという状況になるのが常でした。私は、何故か進んで厳しめの教授の部屋に行き、抽選もなく受講生認定をされました。英語Ⅱで 2 講義、中国語Ⅱで 2 講義、週に 4 つの語学講義を受けるわけですが、いずれも内容・出席厳しいものがありましたね。英語・中国語とも予習量が半端なく、欠席を 2 回したら単位はもらえないというレベルでした。私はこのとき猛烈に後悔しました。何てことをしてしまったんだ…と。5 月までにすべての授業で 2 回欠席し、早くも 2 年生の語学の単位はもらえないことになります。もっと言いましょか。文学部は英書購読や中書購読なども受講しなければなりません。私は中書購読は 3 年生で受講するつもりで、2 年生のうちに英書購読の単位を取ろうと思い、京都府立大学から出講してきていた K 村教授の購読を受講しました。これがまた無味乾燥なのです。イギリスの戦闘的女性参政権運動者(サフラジェット)と穏健的女性参政権運動者(サフラジスト)の争いを毎週予習し発表しながら 90 分も受け続けなければならないのです。苦痛以外の何物でもありません。この授業も出席にはうるさくて、遅刻は 1 / 3 欠席に換算されました。私はこの換算を知っていましたが、あま

りにも苦痛な時間だったので、毎回半分ぐらい遅刻して行きました。本当に失礼な受講生だったと思い、今はかなり反省しています。この語学関係のうんざりさで、5 月中頃には向学心のかけらもなくなっていました。

この気持ちに追い打ちをかけた事件が文学部基礎現代文化学ゼミⅠで起こりました。大学では“ゼミ”なる形態の授業が必ず開講されます。いろんな内容があると思いますが、文学部では、何かの名著をみんなで読み進めていき、毎回章を決めて、担当者に概要を発表させ、みんなで議論する、というスタイルが一般的ではないかと思います。現代文化学系の現代史学・現代日本論に進もうと思っていた私は、2 年生で基礎現代文化学ゼミⅠ、3 年生で基礎現代文化学ゼミⅡの単位が必要でした。いまだにこのゼミの形態が有用なのかどうか判じかねてはいますが、この単位を取らないと卒業できないので出席は絶対です。ただ、1 回目のガイダンスの時に K 教授が嬉しいことを言ってくれました、「みなさんは年に 1 回発表してください。その発表以外のときは全部は来なくてもいいです」と。これを聞いた瞬間に私は、一番最初の発表は気が引けるけど、GW 後の 5 月に発表して、後は全部休もうと考えました。

私の 5 月の発表の題材はトクヴィルの『アメリカのデモクラシー』に決められます。まず、図書館でこの書物を探すことからスタートするのですが、当時はパソコンで蔵書検索できるシステムは構築されておらず、カード検索をしなければなりません。蔵書の 1 冊 1 冊には、著者名・発行年度・書架の場所が記載されたカードがあり(めっちゃくさい!)、あいうえお順などでカードをまずカード一覧場所で検索し、その後書架に行って本を取りだし、受付で借り出し申請をする順となります。私はカード検索などしたこともなかったので、友人の O・N 君に本の借り出しをお願いしました。そして、O・N 君からもらった『アメリカのデモクラシー』の担当章を読み、ある程度まとめてゼミの時に発表しま

強者の戦略

した。発表後はK教授から意見をもらうはずでしたが、K教授の顔色が尋常でないぐらいに怒気を含んでいるように見えました。そこから発せられた言葉は意見ではなく、「君が依拠した書物は、第3版かね、第4版かね？」という質問でした。何を聞いているかまったく分からなかったので黙っていると、「トクヴィルは第3版から改訂を加えて第4版を出版しているんだよ。私は第4版を君に指定したはずだ。この発表のもとになっているのは第3版ではないかね」と言葉を継いできます。私は、書物名しかチェックしていなかったのが、第3版や第4版を考慮しなければならないことを、言われている間に気づいて血の気が引いていきました。受講生20人の中で1人だけ徐々にキレられていっている瞬間ですからね。さらにK教授は「君は第4版がなかったから第3版で発表したのかね。私が調べた限り附属図書館には第4版はあったが、どこで調べたのかね？」と迫ってきます。もう私はウソをついても仕方がないと思い、「すいません。この本は私が探したものではありません。カード検索の仕方が分からなかったので友人に頼んで探してもらいました」と赤裸々に告げます。後で友人K・Mは「何でもそこまで全部言ってしまうんだ。怒りに火をそそぐようなものだろう」と言ってきましたが、怒られていた時の私は潔さを重視したのです。この私の発言を聞いたK教授はもう収まりがつかず、「君は一体何をやっているんだ！歴史家というものは自分で歩いて自分で資料を探すものだろう。君は現代史に進もうと考えている一歴史家のはしくれとして恥ずかしくないのか！！」とものすごい剣幕で叱責されてしまいました。この後、発表に対してどのような意見が述べられ、どのような議論がなされたのか、まったく記憶に上りません。ただ、文学部が育成しようとしている歴史家というのが、どれだけ厳しい道のりを超えていかなければ辿り着けないものなのかを身にしみて分かった瞬間でした。私は、この教授に会いづらいということと、向学心の低下から、結局この基礎ゼミIには、

この回以降訪れることはありませんでした。

6月からは、語学の授業に行く必要性がなくなり、基礎ゼミIに行けなくなり、他の授業に対する愛着も減っていきました。K村教授の英書購読に遅れて参加するぐらいしか京都に行くことがなくなったので、定期券の購入も辞めました。この空虚さを埋めるため、2年生の大半は某塾の社会科の講師、算数の個別指導講師、テストの採点員として生きていくことを決めました。プリント作成の技術、どうしたら分かりやすく話すことができるか、といった塾講師の基本的スキルは、大学から離れていたこの時期に身につけることはできたとは思いますが。

“大学生時代はモラトリアム期間だから、存分に遊べばいい”という意見もあるとは思いますが、今の私は、“大学ではやはりちゃんと勉学を続けるべきだ”というように思うようになりました。1年まったく大学での勉強をさぼっていた人間が何を言うてるねんと思われるかも知れませんが、“遊ぶために大学に行く”という感覚では、新しい時代に対応できないと思います。真面目でない2年生を送ったつけが、どのように3年生になって襲ってきたかは次回に述べて参りましょう。今回の原稿は反面教師としてみなさんに読んでいただければ幸いです。